

第1回ワークショップ記録

びわ湖大津歴史百科 第1回ワークショップ

「心の遺産、滋賀はそれをどう見せるか」

講師：日高 健一郎（筑波大学名誉教授、大阪大学国際公共政策研究科招聘教授）

内容：講演／見学（非公開文化財特別公開 三井寺唐院大師堂および三重塔初層内部）

日時：2016年9月3日（土） 13：30～16：30

場所：三井寺事務所（〒520-0036 大津市園城寺町246）／三井寺境内

【講演概要】

湖南に三井寺、延暦寺、石山寺の伽藍を有し、湖北・湖東に素朴な信仰の里が広がる滋賀県は、「神と仏の美」を誇る傑出した文化と歴史の地である。精神の営みを語る、豊かにして普遍的なその「心の遺産」を、県域のみならず日本の貴重な財産として次世代に継承するためには、まず県内外、国内外の多くの人々が滋賀を訪れ、それを見て親しむことが欠かせない。文化遺産の公開と国際交流の動向を踏まえて、世界の類例とその「見せ方」を紹介しつつ、文化をツールとする滋賀県の活性化のために、その「心の遺産」をどのように「見せる」か、を新たな提案を含め、世界に広がる視野から文化遺産を「見せる」ための工夫と方法を考察する。

【講師プロフィール】

日高健一郎（ひだか けんいちろう）

筑波大学名誉教授、大阪大学国際公共政策研究科招聘教授／地中海建築史、世界遺産学／工学博士。

1948年千葉県生まれ。建築史学を基盤として、トルコ、セルビア、ルーマニア、ヨルダン、チュニジア、リビアなど地中海域の建築遺産、考古遺産の調査を実施、特に1990年代からハギア・ソフィア大聖堂（イスタンブール）の総合建築調査を25年以上にわたって行っている。筑波大学大学院人間総合科学研究科にアジア初となる「世界遺産専攻」を開設、専攻長として教育・研究指導にあたった。イタリア、ギリシャ、ルーマニア、ヨルダン、シリア、エジプト、リビア、チュニジアなどで学術講演や教育・研修指導を行う。アジアでは、カンボジア王国のアンコール遺跡ユネスコ国際専門委員を務め、国内では、水戸市の世界遺産登録推進委員会の座長として「近世日本の教育遺産」の日本遺産登録に貢献した。

■ 挨拶（総本山園城寺執事長：福家俊彦）

ここ大津には沢山のお寺がごございますが、「秘仏」になっているお寺が多いです。ご存知のとおり、延暦寺様は根本中堂の薬師如来様が秘仏ですし、私共（三井寺）の金堂のご本尊は弥勒様で、これも一度も御開扉したことがない「秘仏」ということになります。私はいつもこの「秘仏」とは一体どういう意味があるのかと考えております。我々の世界というのは、人間だけで生きているわけではなく、「人智を超えたものの存在」というのが常に歴史的にも在ったかと思えます。そのような「我々の及ばない存在」を、人々は生きていく中でどのように活かしてきたのかと考えた上で、いま一度「秘仏」についても考えてみますと、秘仏というのは我々の言葉にできないもの・語り得ないもの、または眼に見えないもの、それらが結晶したものではない

だろうかと思われます。「秘すれば花」と世阿弥の言葉にもありますが、むしろそういう形で、我々がどのようにそういうもの（超越した存在）へアクセスをして、それを感じて、コミュニケーションをとるかという一つの宗教的な制度、それが「秘仏」という制度ではないかと思っています。

土地には、ヨーロッパですと「ゲニウス・ロキ」という言葉がありまして、日本語でいうと「地霊」ですね。我々は「自然の声」というのはなかなか直接的には感じられない。一休さんの有名な和歌に「心とは 如何なるものを 言うやらん 墨絵に描きし 松風の音」という歌があります。音を視覚化する（墨絵に描く）というのは本来ありえないことですが、言葉にならない大自然の声、森羅万象の声、密教ではそれを大日如来の声とも言います、この声を如何に人間の言葉として翻訳をして我々が理解していくか、そういう形が日本の、または世界の人々の「文化」であろうと思いますし、そこには残念ながら抜け落ちるものも沢山ありますが、そういうものをどれだけ拾い集めて十全なものにしていくかということも我々の文化の一つの歩みであろうと思います。

現在、大津でも景観の問題とかですね、風景が変わっていく問題、私も非常に心配しているところがございますけれども、やはり「土地」というのは古くからそういう形で守られてきたもので、その一例が「文化遺産」「文化財」という形で今日まで守られてきたものではないかと思っています。お寺や神社の人だけではなく、そこに生活しているすべての人々、我々自身ずっと昔から連続と続けてきた「心のあり方」「心の持ち方」、それがこの文化遺産を伝えてきた基でありましょうし、それをどのように将来へ渡って次の世代、また次の世代へと伝えていくのかということが今求められていることだと思います。ただ文化財を守れば良いのではなくて、やはりそれを伝えてきたその場の空間「我々が生きている・生活している、その場の空間」を文化遺産とセットにして考えていく必要があるでしょうし、そうでないと我々自身の生き方も変わってきてしまうでしょう。今はそういう意味では非常に危機感を持つべき時代に来ているように思います。

今日は、我々が生活している「滋賀県」、また「大津市」ということで、どういう風に文化遺産を絡めて考えていけば良いのか、どういう歴史があって、守られてきて、今日あるのか、これからどういう形でいけば良いのか、を少し考える機会にしたいと思います。私はここ（三井寺）で生まれ育っていますので、どうしても井の中の蛙的なところがありますが、やはり外からの視点、広い視点、外部の方がどのように滋賀県を見ておられるのか「こういう風にやったらいいのになあ」という広範なお考えを我々も勉強させて頂こうと思ひまして、今日は日高先生をお招きしたわけでありませう。

■ 講演（講師：日高健一郎）

大阪大学の日高健一郎です。現在は阪大に勤めていますが、そのまえは東京藝術大学の美術学部におりました。そしてそのまえは、名誉教授を頂いております筑波大学に永いこと勤めまして、アジア初となる「世界遺産専攻」という大学院をつくりました。

今回、三井寺執事長の福家様からお話を頂いたとき「私でよろしいでしょうか？」とお聞きしたのですが、「滋賀県を外から見てお話し頂くのはどうでしょうか」ということで、滋賀県に住んだことの無い私ですが、どうぞ一つの考え方、あるいは意見として受け取って頂いて、ご批判なり修正なり、また色々教えて頂ければと思います。精一杯やりたいと思います、どうぞ宜しくお願い致します。

----- 以下、スライドを使用しながらの講演 -----

はじめに

本日はこの5項目についてお話していきます。最初は「1. 滋賀に学ぶ」ということで、滋賀のことを皆さんと一緒に、知識として共有したいと考えます。それから「2. “美の滋賀”再考：滋賀から大津へ」では、5年前から続いている「美の滋賀」というキャンペーンがありますが、それについて少し、外から見た私の考えを申し上げたい。「3. 心の遺産をめぐる“場”：美術館」ここでは「心の遺産」ということを説明し、そのあと「遺産を見せる場」ということで美術館のお話をさせて頂きます。そして「4. 見せ方の美学と現実」。最後に、少し大胆な提案になりますが、私の考えを皆様にお示ししたいと考えています（「5. ルーブル・プロジェクト」）。

多少私の経験にも照らし、「外から見る」あるいは皆様にとっては滋賀県という枠を越えて外に視界を開いて頂くことが出来ればと考え、講演全体をそうした調子で進めていきたいと思えます。

1-1. 滋賀に学ぶ—文化的指標・意識から見た滋賀と大津

滋賀県は人口140万人。人口密度では全国15位で上から三分の一くらいのところにある。総面積、財政力指数、とありますが、注目すべきはこの「平均年齢ランキング45位」これは全国で若いほうから3番目ということで、つまり滋賀県は非常に若い力に溢れている。大学もあり、滋賀県に住んで近隣県に働きに出ている方がすごく多い。65歳以上の割合でも、少ないほうから全国6位というデータです。完全失業率、これも全国46位ということで、失業率が少ないということですね。そして、私が非常に興味を持ったのは「図書館の蔵書数」で、これを人口で割ると全国1位になります。つまり滋賀県では一人あたり5.6冊の本を図書館に持っていることになり、当然、貸出冊数も全国1位を誇ります。

寺院数、これは人口10万人当たりで見ると、滋賀県が全国1位。また神社の数でも相当上位に入ります。

皆様としてはご存知だったかも知れませんが、私はこういうデータを見せて頂いて「ああ、滋賀県というのは本当に素晴らしい地域だ」と知りました。しかし一般的には「大きな琵琶湖がある。日本一の湖。その周りを帯のように土地がまわっているだけ」というようなイメージを持たれています。しかし実際は、琵琶湖の面積は県の六分の一に過ぎない。それ以外に豊かな自然、深い生活の歴史というものがあるわけですね。名勝の数（全国2位）、史跡の数（全国13位）、国宝・重要文化財の数（美術工芸品、建造物ともに全国4位）、というようなことでも、滋賀県は日本に誇っていい資産を持っています。ところが、外国人に「日本で伝統的な地域は？」と聞くと、まず「京都」「奈良」ということになり、「その次は？」と聞くと彼らは言葉に詰まってしまうわけです。非常に不思議なことだと思います。

さて、美術館の数、これは全国で18位、博物館だと14位、上から三分の一くらいでなかなか良い位置にいる。勿論これは数があればいいというものではなく、内容の充実度、それが問題になります。まとめると「滋賀県は全国有数の文化遺産を持つ。しかし展示施設ではややランクを下げて全国で上から三分の一の位置にある」文化的に非常に豊かな県である。

1954年に滋賀会館が開館、61年には琵琶湖文化館が開館、それから各地に文化芸術会館というもの5館ほど開館され、色々と文化の拠点が開かれていく。1950年代～90年代にかけて色々な施設が開館している。しかし、2006年になるとこの文化芸術5館は廃止となり、その内4館は関連する各市に移管されます。2008年、琵琶湖文化館が休館になります。これは色々要望があったり反対の動きがあったりしましたが、結局は休館に追い込まれます。それから滋賀会館は閉館（2010年）。そういうふうになります。つまり、華々しい開館というものが続いた一方で、2000年代に入ると廃止や閉館、あるいはお休みというような施設もぼちぼち出てきてしまう。

1-2. 滋賀県の文化行政

県、そして大津・草津・彦根を中心とする市、そうした中では行政のほうでも大変努力をされて色々な政策が実行されています。たとえば2001年「滋賀らしい文化創造の基本的考え方」、これは同年に、国において「文化芸術振興基本法」というのが制定され、その中に「各県、各市、がんばって自分達の文化を振興するような条例をつくりなさい」というようなことが書かれています、それに対応して滋賀県でもこうした動きができてきたわけです。それから「滋賀の文化振興のあり方」（07年）、「“美の滋賀”発信懇話会」これが12年に出来まして活発な活動を展開します。13年には「新生美術館基本計画」が決まります。今申し上げたように、文化芸術振興基本法第4条では、各自治体に、地域の特性に応じた施策の策定およびその実行、というのを求めています、この国法に基づいて滋賀県でも「文化振興」というものが始まっていくわけですね。当然、県というレベルで行うわけですから「滋賀らしい」ということが最も重要なことになります。しかし滋賀と一口に言っても大変多様ではないかと、私は想像するのですが……。最終的に、行政はこの「滋賀らしい」ということを本当に握めたのかどうか、外から見てみると、「どうなのかなあ」と感じることもあります。また、「滋賀県文化振興条例」（09年）というのがありまして、基本理念としてかなり立派な五項目が並んでおり、確かにどれも非常に重要で文化振興にとっても大いに奨励すべきことなのですが、一方で「この文化振興条例を知っていますか？」と聞きますと（滋賀県の調査）、「知らない」が88.6%、「知っている」が5.9%であり、100人に6人しか知らない地味な存在であることもここで指摘しておきたいと思います。

1-3. 行政と文化・芸術、その関係（一般論として）

一般論として、「行政」というものと「文化・芸術」との関係はどうなのか。「文化・芸術の成果」つまり文化遺産はその特性として、効率・効果・会計年度といった基準ではなかなか結果が出ないものですね。従って、行政の一般的な方法と両立しない。ほかのことであれば成果が出て評価されて、報告、ということになりますが、文化・芸術に関してはなかなか客観目標が立てにくい。達成すべき目標値を設定するのも非常に困難である。これはとりもなおさず、文化や芸術というのが自由で独創的であって、それが行政の枠組みやきちとしたメカニズムに当て嵌まらないからです。また一方で、行政があまり文化に介入・干渉してですね……。日本にも厳しい時代がありましたし、今もおお本当に自由な気持で話の出来ない国というのがあるわけで、そういう中で何か文化的な独創性を出すと、すぐに規制されたり、極端な場合は逮捕・拘束されたりという土地も世界にはあります。私もリビアで研究している時に、研究者を15人ぐらい集めて色々説明している中で「とにかくこの遺跡の管理状況は最悪だから、なんとかしないといけない」と言ったら、「プロフェッサ—Hidaka、あなた気を付けなければいけない。リビアでは10人集まったら一人はスパイだから、そういう最悪とかんとかかっていう悪い言葉をいうと、あなたのパスポートは明日なくなってるよ」ということを言われて、「おお、そういう国か」と感じたことがありますけれども……。幸い、我々はそうした国に居るのでは無い。しかし、自由で独創的な芸術に関して行政がコミットするということに、干渉、あるいはそう誤解されるということが行政側にもあるわけですね。従って非常に難しいのですが、結局は、文化の自立性を最大限に配慮した組織の体制や評価システム、手続きなどが必要になってくる。

90年代～2010年代にかけて、自治体は国の下請け機関としての自治体のままでいるか、選択を迫られた時代がありました。文化に手を出せばあだこうだと文句を言われてややこしい、だったら社会福祉、インフラ整備、道路、そういうものを整備して皆さんに満足していただく。「それならそれで良いじゃないか」ということで、文化行政が軽視される、そういう自治体がありました。しかし一方で、文化行政を真面目に取り組み、市民のニーズに対応できるように変化してきた自治体もありました。そういう選択を自治体がして、一方で文化の豊かな自治体、一方であまりそういう領域に配慮・予算を割か

なかった自治体というのもありました。

本当に「文化・芸術」というものは行政に馴染まないのか。確かに馴染まないのですが、こうした動きをそのまま容認するのではなくて、なんとか我々の側から、市民、あるいはNGO、大学、そういう色々な枠、あるいは一つの組織の中でも出来ることを、少しでもまえに進めて行くことは出来ないでしょうか。ニーズはどこの都市にもあって、文化に対する市民の要求というのは強いんです。ですから、やはり行政はそれに応えるべきだと考えます。滋賀県も京都に飲み込まれるのではなくて、独自の文化というもの行政に於いても、そして行政と市民のタイアップを進めて頂ければと思います。ただ、こんなことは一般論としてすぐ言葉に出ますけれども、「実際どうするか」ということを今日は少しお話してみようと思うのですが。そのまえに・・・。

1-4. 文化行政の象徴としての文化施設（一般論として）

文化活動にも色々ありますが、たとえば絵画教室、それから今回も講演会が開かれていますけれど、それ以外にやはり、目に見える形で箱物を作ってしまうというのが非常に手取り早い方法で、1980年代からこれはかなり流行し、「文化施設は町を手取り早く文化的にする道具だ」というふう考えられました。日本はバブル期で、施設建設というのが目に見える形で進んでいきます。しかし、市民と行政の文化意識が高くない自治体では「箱だけ出来て中身が無い」という事態が起きます。30年も前の話ですけども、現在も尚こうした矛盾を抱えている自治体もあります。

私は、滋賀県はとにかく資産がある、市民の方の意識も高い、行政の方も非常に頑張ってらっしゃる、そこでこの新しい「自治体行政と文化のあり方」というのを引っ張るような県になってほしいと思います。

ちょっと批判が続いて申し訳ないのですが、この80年代には多目的ホールというのがあちらこちらにニョキニョキと出てくるのですが、「〇〇交流室」とか書いてあるだけでほとんど一ヶ月も二ヶ月も使われなままの部屋というのがあり、非常に中途半端なコンセプトだったわけですね。文化施設や箱物をつくるということは、悪いことじゃない。だけれども非常に明快なコンセプトと将来展望というのがやはり必要なんですね。80年代の建設はそれを欠いていた。横並びで、お隣の町もつくっているから我が町も作らなくちゃ、というようなことだったんですね。しかし2000年代、そうした施設が老朽化してきます。文化意識も変化していくに従って、第一世代の文化施設の改修・整理がいま必要となってきている。色んなところで、新しい文化施設のあり方というもの求められている時代です。

1-5. 滋賀に学ぶ <結論>

さて、この章の結論として、まず文化財保有数から見ると、とにかく非常に自慢できる資産を持っているのが滋賀県であると。一方で、滋賀会館、琵琶湖文化館を先駆として80年代90年代に文化施設が開館していく、しかし2000年代に入ると休館あるいは休業状態が目立つようになってきた。国法「文化芸術振興基本法」に対応して「滋賀県文化振興条例」が制定され、滋賀らしい文化の追求というのが目標になる。しかし申し上げたように、100人集まると6人しかその条例の存在を知らない。もう少し、広報も必要かなと考えます。そして2012年、皆さんもどこかご覧になったりあるいは実際に活動に従事されたりしているかも知れませんが「美の滋賀」構想、それから13年にはその中核になる「新生美術館基本計画」というのが行われてきます。

この章（滋賀に学ぶ）について、外から見た私の問題提起としましては、果たして県の文化振興の過程で「滋賀らしさ」というのははっきりしたのだろうか、ということです。滋賀らしさは、もちろん滋賀県といえども湖の南と北、西と東でまった

く違います。多様であってもいいのですが、「滋賀県」の中に入れば何でもアリ、というのではなかなか「らしさ」は打ち出せないのではないかと。それから、新生美術館の計画が今走っていて、「美の滋賀」構想の中でそれは中核に据えられていますが、それは普遍的「美」だけれどもそこに領域設定としての「滋賀」という言葉も入ってくる。美術館というのはなにも滋賀県だけのものとしてあるわけでは無いですね、もちろん県の税金を使う訳ですから県民のための施設であるべきですが、さらにそれを越えて、色々な方に観に来てもらわないと美術館の経営は成り立たないわけです。こういう問題提起を私はしてみたいですね。

2-1. 「美の滋賀」再考：滋賀から大津へ

2011年平成23年に、このキャンペーン・交渉がスタートします。ここに報告書が出ていますが、ドドドッと2011年の5月から6月にかけて、「美の滋賀発信懇話会」「近江の仏教美術魅力発信検討委員会」「滋賀県立近代美術館機能・発信力強化検討委員会」「アール・ブリュット（生の芸術、アウトサイダー・アート）発信検討委員会」・・・まあ沢山の委員会が出来ます。確かに、各々のフィールドから専門家が集まって意見を述べ合っていく、それを「美の滋賀」に入れていくという事はプロセスとして良いと思いますが・・・。その中で、「新生美術館」というのが提言として盛り込まれたわけです。

そしてこういった行政の動きに対し、「美の滋賀発信推進室」という組織の組織目標の評価がなされました。「滋賀をみんなの美術館に」というコンセプトのもと10年を見据えた長期的な指針を得たことが非常に大きな評価となっています。また、アール・ブリュット振興でも成果がありました。翌年、さらに委員会や会合が続き、新生美術館の基本計画を作ろうという動きになってくるのですが、しかし「どこに作るんだ」「どういう機能にするんだ」ということで、ここで意見が分かれます。そしてその年の組織評価では——これはもちろんネットで公開されています——「美の滋賀」づくりの推進ではこの組織はかなり頑張った「◎」、アール・ブリュットの振興も非常に進んだ「◎」、しかし新生美術館の実現に向けた取り組みの推進は「△」ということで、なかなか基本計画がまとまらない。2013年になり、「明日の美術館を創ろう」県民フォーラムの開催、この辺りで徐々に計画がはまり、新生美術館基本計画というのが決まりました。

2-2. 「美の滋賀」に関する会議

これも会議録がネットで公開されていますので、丁寧に読んでいきますと、色々なことがそれぞれの専門家から言われています。特に「美の滋賀」って一体何だ、というようなことが言われてなかなか内容が決まらない。それから「美の滋賀っていうのは編集していくのが難しい」と仰る方もいる。すると一方の人が「もう解釈は自由に、美の滋賀っていうのをとにかく考えて下さい」と言うのですが、それは内容が定まっていないのに考えろというのは無理がある気がしますね。また、「美の滋賀が多様すぎてこんなこともあんなことも全部美の滋賀だ、という中で、何をやったらいいのでしょうか」という意見もあったり、「美の滋賀の入口である新生美術館が出来ることに伴い、美術館にはこういうことを要望したい」というようなお話もありました。さらに「バラバラというのは実は面白いんだ、そのバラバラでやってみようじゃないか」という意見もありますが、しかしやはり建物ひとつ建てる、そして市が全体のアピールを県内外に打ち出していくときに、バラバラのままでも本当にいいのかと、外から見えてちょっと疑問に思いました。

また、このような多様な意見・要望を誰がまとめるのかということが、資料を読んでもなかなかはっきりしてこない。もちろん皆を押さえてってことではないのですが、やはりイニシアティブをとって指導力を発揮するのは一体誰だったのだろうかということが、私には見えてきませんでした。

「美の滋賀というのは、滋賀県全体、各地域の多様な美・生活を含む広い事業方針で、多様性と、みんなと一緒に並び立つということが特徴である」、「美の滋賀では新生美術館が入口である」——「入口」という言葉も意味合いが多様ですが、これは新生美術館それ自体を総括的に示すコンセプトではなく、「ここは入口です」そうすると「そこに入ったところが滋賀県です」ということになり、なにか新生美術館というのは観光案内所のようなイメージで捉えられているのかなという考えすら持っています——。「美の滋賀」は県域全体の活性化・文化振興を目指しているのですが、他の県でも似たようなことをやっているんですね。だからやっちゃいけないということはないが、しかし「滋賀らしさ」ということも意識しているなかで、他の県では無い、滋賀県として何をやっていくか、ということが今ひとつ私には分かりませんでした。構想実施から5年、当時は「美の滋賀」は10年計画ということになっていますが、ちょうどその真ん中の5年を今迎えています、もう少しこれについて考え直してもいいかなという気が致します。特に、当初、出発点では、「滋賀県という地域の中で色々なものがまだ埋もれたままである、みんな気づいてない、それに気づいてそして地域の人にもっと元気になってもらおう」ということでも出発したんですね。大変、配慮の行き届いた細かい政策であったかと思います。ただ、5年というのはやはりあるひとつの区切りで、文化や美に関して今、この滋賀県の外というのを考える時期にきているのではないか、というのが私の印象です。

2-3. 「美の滋賀」キャンペーン、その特徴と問題点

①番、県域全体を対象として文化振興に貢献している。②番、「美」というのは非常に多様だった。多様性というのは長所と言えば色々なものを取り込むことが出来るが、一方で中途半端になりやすく、まとまりの無いキャンペーンになりかけている。「美の滋賀」自体が多様であるためにコンセプトの全体構造が不明瞭となったまま、しかし個別の活動はどんどん成されている。③番、「滋賀をみんなの美術館に」とあるように、県民が身近な美を改めて認識してそれを地元で愉しむ、これはもちろん大変結構な構想だが、そうすると「みんなの美術館に」という「みんな」は滋賀県民だけになってしまうため、それを滋賀県という枠を越えて外へ発信していく、あるいは世界の違うもの（文化・美）を滋賀県に呼び寄せる、そうした発想がここにはちょっと弱かったというふうに私は考えます。④番、美の滋賀の中核プロジェクトとして「新生美術館」の整備が設定されているが、①②③と見てきたように美の滋賀というのは地域密着型で、一方、美術館というのは県の中だけじゃなく外に向かって開いていくものだとする、「美の滋賀」という県のコンセプトの中に、外へ向かって開くべき「新生美術館」を押し込めてしまっているのは如何なものか、という気持を抱きました。

2-4. 県立琵琶湖博物館（草津市）の改修例

ちょっと「大津」から離れますが、「県立琵琶湖博物館」これは今ちょうど開館から20年を迎え、リニューアルということでチラシが配られ、また学芸員の方も大変頑張っている。滋賀県最大の資産・琵琶湖の国際性を意識した計画としてスタートしているのです。今回、リニューアルの目標としてこの博物館が掲げているのは「五感で世界を読み解く展示」これをまた更に進める。それから「より参加性の高い博物館」にする。来てもらう、そして皆に伝統的な文化、生活のあり方を……。まあちょっと変な話になりますけれども、開館当初、かなり不便な昔のトイレを博物館の中に再現したところ、本当にそれをトイレだと思って用を足してしまった人がいた、というお話があります。有名な「トイレ事件」ということなんですけれども。そういう何か、「近さ」、本当に「自分のおじいちゃんおばあちゃんが、ああこうやって生活してたのか」というようなことがそこで分かる、そして触っても可い、そういった参加性の高い博物館というものを更に目指しますということですね。それから「世界に目を向ける活動」——これは琵琶湖に関するILECの活動などありますが、湖沼会議など学術面では国際化が

進んでいるわけです——というのをこのリニューアル計画の中に明示しています。琵琶湖は日本の遺産だけでなく世界に誇る非常に貴重な湖であり、また生態系であり、また生活の場であった、ということですね。こうしたことと今の新生美術館の計画とを比べると、迫力として、琵琶湖博物館は頑張っているなという気持ちを受けてしまいます。さらにこの県立琵琶湖博物館というのはなかなか好評でありまして、開館後10ヶ月で来館者数は100万人を突破しました。数字をあれこれ言うのは良くないのですが、公のお金を使ってつくった施設ですからやはり多くの人に楽しんでもらい、そしてまた多くの人に学んでもらう、そういう場所であるべきです。

さて、県立琵琶湖博物館は一体何が新しかったのか。今となっては20年前のことですけれども、実は、開館の7年前から既に学芸員を採用していたのです。「まあそんなことぐらいあるでしょう」と思うかも知れませんが、そうした学芸員が7年後の開館を目指し、ただ開設の準備をするだけではなくて活発に独創性をもって活動する、これは当時かなり画期的なことだったんですね。従来は、予算をつけて施設をつくる、まず箱をつくる、そして有識者がもっともらしい形で集まりまして意見を言うのだけれどもあんまり大したことなく、さらにそれを受けて展示業者が利益誘導型の設備を「これやったほうが良いですよ」「あれをやりましょう」と言ってどんどん持ってきて、お金をガッポリ稼ぐ、そしてすべて決まったところで学芸員が採用されて「あんたここで頑張んなさい」とってことで言われるわけなんです、琵琶湖博物館ではこの順序を逆にした。そして学芸員の真面目で独創性のある発想をどんどん採用していった。誰がそうしたかってことは、もちろん館長、あるいは県の担当者、色々あったと思いますが、誰がやったかということではなくて、私は「こういうプロセスがかつて滋賀県にあった」ということを強調したいですね。当時の慣例とはまったく逆転したものが滋賀県でちゃんと実行されて、それが実績を上げた。10ヶ月で来館者が100万人突破。こうした過去の例も、我々はもう少し尊重すべきだと思います。それから、何が新しかったのか(2つ目)、「滋賀県まるごとミュージアム」滋賀県全体をミュージアムにしようというコンセプト、そして「博物館は滋賀と地域への入口」ここに来てもらってそして滋賀を学んでもらうというコンセプト……。ところがですね、これはちょっと、私は事情が分かっていないのに失礼かも知れませんが、「〇〇まるごとミュージアム」や「〇〇への入口」というのは新生美術館の計画にも書かれているんですね。意識して書いたか、なんとなくそうなってしまったのか分かりませんが、この27年も前のコンセプトと今新しく生まれようとしている新生美術館のコンセプトがダブっているというのは、少し心配な気がします。

2-5. 湖都、大津に目を転じると・・・

ということで今は草津の話でしたが、再びこの「大津」に話を戻しますと、標語としてはですね「人を結び、時を結び、自然と結ばれる、結いの湖都、大津」ということになっているそうです、皆さんはご存知でしたでしょうか。「大津市のまちづくりに関する市民意識調査」というのも毎年行われて、町の活性化・都市計画についてちゃんと報告書が出ております。かなり厚いんですね。そして大津は、当然ですが滋賀県の県都として滋賀の中心であり、文化領域でも各種施設が充実している、皆さんよくご存知の通りです。こうした施設(琵琶湖文化館；1961、県立図書館；1980、近代美術館；1984、大津れきはく；1990、大津市科学館；1992、びわ湖ホール；1998)は、すべて90年代までに作られています。つまり今から20年ちょっと前のお話ですね。それをこれから充分活用していくという点では大変結構なんです、この良き時代から20年以上経まして、これからの大津は90年代の遺産に頼るだけで生き延びることが出来るだろうか、ということも少し疑問になるのではないのでしょうか。当然、市としては色々なことを考えており、「第2次大津市文化振興ビジョン(2011年)」「大津市文化振興計画(2012年)」それからこれの第2次、そして湖都の文化をどう展開するかということを市の

有識者会議で議論しています。ただ、決定打がない、というふうには外から見て感じました。2011年、「協働」というのが大津市のキーワードになっていくようございまして「大津市“結の湖都”協働のまちづくり推進条例」、それから「大津市協働推進計画」が12年から5ヵ年計画で予算が出されています。

2-6. 「美の滋賀」と大津の関係

さきほどからお話してきました「美の滋賀」構想、これと「大津」との関係、両者をつなぐ鍵となっているのは「新生美術館」なんですね。この新生美術館についてどうするか、どういった要望があるか、ということで会議が重ねられて色々意見が出されました。しかしこれが「美の滋賀」の中のひとつと位置づけられていますので、その影響を当然受けて、非常に多様な議論・要望が出てきているようです。たとえば第1回2015年7月9日の議事録を見ますと、「鑑賞者寄りではなく、表現者・アーティストを含めてつくるそういう美術館にしてほしい」なるほど。それから「地域連携を重視した美術館にしてほしい、地域づくりの活動拠点としての美術館を」しかしこれは一個所にしか建てることができません。それから「館というより、町に出ていって何かを企画する美術館活動をやってほしい」これは建物というよりは活動についてですね。それから「ワークショップを行える美術館にしてほしい」。確かに色々な方がそれぞれの立場から意見を仰っている、非常に多様ですね。しかし何を指すかということがやはり一つ、せいぜい二つくらいに絞られてこないと、なかなか建物というものは建ってきません。そこで、この美術館円卓会議の出席者のなかで一名だけですね、こういうことを仰った方がいる「新生美術館は何を目指すのか？特徴は何か？それを一言で言い切れるメッセージが必要なんじゃないですか」と。これは正に、仰る通りでありまして、「三つのテーマ」——これについてはあとで説明しますが、「神と仏の美」「近現代美術」そして「アール・ブリュットの美術」——その上に持ってくる大きなテーマが必要ではないか、ということも仰っている。これは私は非常に注目しております。

この新生美術館の会議の論調ですが、基本的には「参加型」「地域密着型」の美術館に関する要求です。しかしこれらの多くは既に琵琶湖博物館で類似の構想として提案され、計画・実施されています。勿論、美術館と博物館は違うものですが、「参加型」「地域密着型」というテーマで再び美術館が作られるのが良いかどうか、それとも別の選択肢があるのか、考えてみてもいいのではないかと思います。それからもう一つ、この円卓会議には、滋賀の誇るべき仏教遺産あるいは神社の遺産を実際に管理されている方が出席されていないように思われる。また、三本柱の一つでもある「神と仏の美」というテーマを、新生美術館の中でどのように位置づけていけば良いのかははっきりしていない。さらに、「美の滋賀」のときと同様に、新生美術館の計画についても指導力を持ってまとめる人がいない。

2-7. 「美の滋賀」再考 <結論>

「美の滋賀」は県全体の文化振興策として色々な取り組みの実施に貢献してきた。そして一定の成果がある。しかし「美」の内容というのは多様で、生活全体に関わる色々なものが発掘されてきたため、なかなか議論が収斂せず、キャンペーンの基礎概念を欠いたまま5年が経ってしまった。特に、県外へのアピール度は未知数のままである。そして「新生美術館」計画を「美の滋賀」の中心にする、あるいは入口に位置づけること、これは私の印象としては少し問題があるように感じています。それは、県内を視野とする「美の滋賀」と県外・世界の芸術を受け入れる「新生美術館」のコンセプトとが両立しないのではないかと考えるからです。「美の滋賀」の多様性は、「新生美術館」の基本構想を拡散させてしまう恐れがあるのではないのでしょうか。また一方で、草津の琵琶湖博物館は「滋賀県まるごとミュージアム」「博物館は滋賀と地域への入口」というコンセプトを27年前につくりまして、展示内容・方法にも工夫を凝らしている。県立博物館の成功例として高く評価できる、と私

は考えます。しかし大津市では、主として90年代に便利な施設が次々と建設されましたが、最近では新たな建設はなく「文化振興ビジョン」「文化振興計画」が策定されるのみである。「結」と「協働」が大津市の文化振興の核とされるが、それを実現・展開する場所というのが20年を経て新鮮さを失いつつある。何か、画期的なことは出来ないだろうか、という状況であります。

2-8. 「美の滋賀」再考 <問題提起>

びわ湖ホールに象徴される90年代の活気ある滋賀と大津を取り戻す必要がある。大津祭曳山展示館なども、皆さん大切になさっているのですが非常に地味なんです。大津の文化としてもっと前に出してもいいのではないかと思います。また周囲の商店街も、もっと元気になるはずなのにどうしてだろうかと感じます。お店が閉じられていて幾分寂しさを感じます。市、県の枠を越える大きな構想が求められているのではないかと思います。

「新生美術館」構想・計画は、「美の滋賀」キャンペーンの枠に入りきるものなのだろうか。外へ向かって広がる、ということを考えても良いのかも知れない。「滋賀という枠を越える美術館をつくる」滋賀県に在って、滋賀県の人々が享受する、しかしそこには滋賀県を越えた色々なものが入ってきて、また滋賀県の遺産も外へ向けて発信されていく、そういう差別化が必要ではないでしょうか。

また、大津の文化振興に関しては、成功を収めている琵琶湖博物館とは明確に異なる役割・機能を探してみても良いのではないかと思います。琵琶湖博物館だけが唯一の方法ではないのですから、独創性のある新しい文化の発信・見せ方というのを今こそ考えてみる時期がきているように思います。

3-1. 心の遺産をめぐる「場」：美術館

「心の遺産」という言葉を私はここで使いたいわけですけれども、まず「遺産」というのは、世界遺産・文化遺産・自然遺産・日本遺産・近代化遺産などが随分報道などでも使われるようになってきています。勿論、これらの基になっているのは世界遺産制度ですが、その出発点となったのは、第一次・第二次大戦による文化の破壊への反省というのがヨーロッパにおいて起こり、それからアメリカでは自然保護の活動というのが非常に盛んになっていったのです。文化と自然を一つの条約の下で一括して保護していこうという特殊な制度が生まれたわけですね。ただ、その制度自身は欧米を中心に生まれていますので、西欧の文化——エジプトも含まれますが、ギリシャ、ローマ、中世ヨーロッパに続いていく西欧中心の文化——そして先進国が持っている自然というのが重視されてきました。その後、第三世界、途上国の文化を含む「文化の多様性」ということがユネスコの中心理念になっていきます。ユネスコの求める「多様性」というのは、ただバラバラに異なるということだけではなく、その根底に「人間の文化的営為としての共通性・普遍性」があるもの。「傑出した普遍的価値 (Outstanding Universal Value : OUV)」ということです。Universal とは、人間が生命として存在する基本的な望み、権利、義務などに使うものだとは私は理解しています。

「多様性」と「普遍性」は一見相容れないように見えますが、そこには共通するもの「心」——または精神——がある。個々人、時代、地域・国は異なっても、心というものは皆が共有する原点であり、それが「遺産」として文化の形をとり伝わってくる。類型、歴史、素材などで遺産を分類するとしても、その根底にある人間の心・精神・衝動・情熱などに遡って考えていく必要があると思います。つまり、人間の遺産というのは「人間の心の表現として普遍性を持つ」ということ。それは滋賀であっても、日本、世界全体であっても同じことです。

3-2. 「超える」「つながる」という発想

「心の遺産」は、人間がつくった国境や意識的につくっている境、そういうものを越えて外の世界につながるものである。「心の遺産に国境は無い」ということを私達は考えるべきだと思いますね。「滋賀県だから」「大津市だから」という動きではなく、もっと開いた形でも良いのではないのでしょうか。では、具体的にどうするのか。

文化関連での世界とのつながり方として、「ネットワーク・国際機構でつながる」というやり方があります。たとえば「世界で最も美しい村」連合。日本でも44町村が「日本で最も美しい村」連合に参加している。山梨県の早川町などは過疎化・高齢化が進んではいますが、非常に水も綺麗で美しい景色があります。だから大津もそうなりましようというのではなく、こういうつながり方がある、ということですね。それから「創造都市ネットワーク（CCN）」というのがありまして、これの日本版「CCNJ」には実は「びわ湖ホール」も——都市ではないのですが——組織として参加しています。ユネスコ世界遺産やユネスコ・エコ・パークなども、つながり方として当然あります。

また、「1対1でつながる」というやり方もある。これは姉妹都市、友好都市、大規模国際大会のキャンプ地誘致などといったものです。日韓ワールドカップのときに、大分県の中津江村というところにカメルーンの選手団がキャンプを張って、一気にこの村は国際化した。余談ですが、このとき面白いことに、50代以上の村民は大歓迎でカメルーン選手と接しましたが、逆に若い人たちはなかなか解けこんでいけなかったようです。

さて、こうした「地方創生」に関しての私の持論ですが、自治体の発想はどれも似たり寄ったりで、他の自治体との差別化ができていないと思います。そういう自治体相互の競い合いではなく、世界と直接つながる、サシでつながるということも有っていいのかも知れない。

滋賀と世界をつなぐためには、まずは滋賀の「心の遺産」を置く・受け入れる「場所」が必要ですね。それから「国際化」というものを考えると、勿論、大津市でも「大津市国際化推進大綱（2013年）」というものが作られています。その内容は他の自治体とよく似ていて画期的なところが足りない。また琵琶湖と環境関係では国際交流が進んでいますが、学術面です。幾分地味だなあという印象です。京都・大阪とはひと味違った世界とのつながり方は何なのか、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

3-3. 遺産の共有と「場」：新生美術館の構想と計画

滋賀県立近代美術館の改修・整備が議論され、「新生美術館基本計画（2013年）」が決まり、会議・ヒアリング・設計審査を経て基本設計案が決定されました。その基本計画では、「神と仏の美」「近代美術」「アール・ブリュット」という3つのプログラムで展示を構成する、設計の基本理念としては分棟式・回遊式とされています。しかし、3つの柱を束ねる基本のコンセプトがまだつくられていない、と私は感じました。富山、大阪、京都でも現在、公的な美術館の建設が進んでいるなかで、滋賀県はライバルの美術館との差別化も考えないといけない。

総合政策部・教育委員会共同で作成された「新生美術館づくり」によりますと、「収蔵展示の分野拡大」「県民ギャラリーの拡大」「自然の美も楽しめる」「県域に活動展開」「企画展示の充実」など色々ありますが、依然として大きなコンセプトというのが見えてこない。しかも少し欲張り過ぎて、すべて実施可能なのか、私には疑問に思われます。

また「新生美術館基本計画の概要」によれば、新生美術館の3つの使命とされるものは、①「美の滋賀」の拠点となる、②人の育ちと共生社会の実現に貢献する、③まちづくりや観光、産業などと連携して活力ある地域社会を実現する、となっ

すが、しかし「美術館だからこそ果たすべき使命、美術館を作らなければ出来ないこと」をもう少し強く出すべきではないでしょうか。

3-4. 美術館の原点に向けて

「美術館」とは何の為の場所なのかということ、私はもう一度考えてみたい。

美術館の原点は、「普遍性=枠を越えて」世界の「美術=心の遺産」を「見る・見せる」ための場所。世界の大美術館といふのは依然としてこの原点を守り続けている。一方で、それは19、20世紀の古い美術館だと捉えて、近年の美術館では「個性=地域とともに」盛り上げて「創作・体感=知の遊び」を「楽しむ・学ぶ」参加型のものも多い。一体、新旧両タイプの美術館を、ひとつの建物の中に融合することは可能なのだろうか。

新生美術館の3つのテーマについても、まとめる大きなコンセプトをつくるのは非常に難しい。初めに大きなコンセプトがあってそれが3つに分かれたのではなく、「必然性のないまま3つのテーマが集められたこと」が非常に問題ではないでしょうか。また、この3つのテーマに関しては、収蔵・保存・展示方法もまったく異なります。それを一つの建物の中でやろうとすれば、勿論、部屋を分ける、順路を明確に示すという方法もあり得ますが、しかしアレもコレもやるという中で、一体「新生美術館」は全体として何なのかという質問に答えられなければ、近隣のライバル館とも競っていくのは難しいでしょう。

新旧両タイプの美術館は明確に異なります。施設を分けて、お互いの機能を特化・充実させていくという選択肢を、長期的に考えても、私としては提示したいんですね。

しかしこれまでの新生美術館計画では、対案を議論されないまま、新タイプに偏った構想・計画が進んでいる。それから、かつて「琵琶湖文化館」において、滋賀県の神社仏閣が所蔵する貴重な文化遺産を寄託者に安心してもらう形で保存・展示する、という案も出ていたのですが、いつのまにか「美の滋賀」キャンペーンに吸収されてしまった。新タイプのような参加型、気軽にいける美術館というものも勿論必要ですが、そこに国法・重要文化財、仏教・神道美術と一緒に保存・展示してしまっても良いのかどうか、外から見ていると疑問に感じます。

3-5. 心の遺産をめぐる「場」 <結論>

普遍的な「心の遺産」にとって、境界を区別するということはあまり意味が無い。世界とのつながりということ意識してみても良い。それから、「心の遺産」の展示の場として「美術館」がありますが、美術館への期待が多様であるがために、その全てを満たす「場」の形成というのは非常に難しい。また、原点的な美術館と、来館者の交流・創作への参加を促すような参加型美術館とは、分けて考えるということも一つの方法ではないかと思えます。

3-6. 心の遺産をめぐる「場」 <問題提起>

新旧両タイプの美術館は、お互いに別施設に分けたほうが両者の機能・役割が十分に発揮されるのではないかと。

ただし、新生美術館を旧タイプに特化したとしても、(休館中の)琵琶湖文化館の代替施設にするだけでは来館者増は望めない。なにか画期的な新発想が不可欠であると考えます。

4-1. 見せ方の美学と現実

修学院離宮の庭園、また円通寺の庭園、どちらも京都の庭園ですが「借景」ということで非常に有名です。いずれも比叡山を借景としておりますが、「借りる」ということは日本の美学、日本の知恵であると私は考えます。「景」を「借りる」とはどうか、それは遠くの雄大な景観を「引き寄せる」こと、また逆に目の前の空間を無限大に「広げる」こと、遠景を「取り込み」それと「融合」すること、遠近の「対比と調和」を作り出すこと。

従って、「借りる」ということは非常に創造的な行為です。「ちょっと足りないから貸してよ」ということではなく、むしろ手元には十分な材料が揃っている。その材料に別の要素を加え、全体で新たな組み合わせをつくりたい、そうした気持を実現するための手法なんですね。では、滋賀は「何を借りるか」。そしてそこには、「借りることでのどのような新しいものが出来るか」というイメージを持つことも大切です。

借景的な考え方をもち、普遍的な美の展示の場「美術館」についても考えてみる。「引き寄せる」ことは、世界の名作を滋賀に持ってくる。「広げる」ことは、滋賀の遺産を世界に見てもらおう。「取り込み、融合」することは、世界の名作と滋賀の遺産を組み合わせることで新たな見せ方が生まれる。そして、心の遺産の普遍性が「対比と調和」の新しいコンセプトを作り出す。私が考えるその新しいコンセプトとしては、「時と空間の対話」ということです。時間的・空間的隔たりをもつ差異ある多くの美術品が、「心の遺産」という基盤をもつことで、互いに対話をするように一つの美しい全体を作り出す、そういった美術館が出来るのではないかと思うんですね。

4-2. 「観光」を忘れてはならない

現実問題として、観光を忘れてはならない。「観光ルネサンス事業基礎調査報告書（2008年国交省近畿運輸局）」を見ますと、「大津市総合計画」「大津市観光振興基本計画」など様々な計画が策定・整理されていますが、「美術館」ということが一つも出てこない。新しい美術館も重要な観光資源になるべきです。でないとは立ち行かない。美学がいくら優れていても、お客さんが来なければダメですよ。

「観光ルネサンス事業基礎調査報告書」による大津市観光の問題点としては、①宿泊客数の低迷。日帰り客が9割で、やはり京都の影に隠れている。②観光都市としてのイメージが不足している。③県内他都市との回遊が少ない。④シティーセールス——大津をいかに売り出すか——ということが弱い。そしてここでも、「美術館（+博物館）」は置き去りにされている。

比叡山延暦寺の世界遺産登録（94年）、全国10番目の古都として政令指定（03年）、大津市景観計画（06年）など大津市も色々努力してはいるが、その枠のなかに何故か美術館が入ってこない。

観光資源として美術館を使うために、立地と話題性（驚き、魅力、唯一）というものが重要だと考えます。新生美術館は現・県立近代美術館を改修するというで文化ゾーンに位置するわけですが、滋賀県が誇る資産・琵琶湖の素晴らしい景観をなぜ利用しないのか。また、現在は寂しさを感じてしまう大津市中心街の活性化も、新生美術館によって図るべきではないでしょうか。それから話題性としては、「えっ」という驚き、あるいは「初めて（日本初）」という持続的なインパクトを作ってみてはどうでしょうか。「大胆かつ独創的な発想」+「滋賀と日本を越える視野」から何が出来るかを考えてみる必要があります。

4-3. 見せ方の美学と現実 <結論と問題提起>

「借りる」ということは、新たな美の創造である。しかし、現実を見ると、観光振興策では美術館が忘れられている。

「新生美術館」の構想・設計では、思想としての「借景」、観光振興の目玉とすべき話題性が求められる。だから、もう少し

元気のある考え方、大胆な考え方もあって良いのかも知れない。

5-1. ルーブル・プロジェクト

ということで、かなり突飛なものではありますが、私が以前から温めていた案をご紹介します。と思います。

有名なルーブル美術館（フランス国立）。収蔵品、実に38万点。そのうち1割の3万5千点が展示されていますが、残りの9割は収蔵庫に眠っているわけです。これを滋賀県にもって来るとどうなるだろう……。勿論それは無理なのですが、こういう案があります。

5-2. 滋賀ルーブル美術館（＝ルーブル美術館滋賀分館）の提案【ルーブル・プロジェクト】

ルーブル美術館の「分館」として、滋賀の仏教・神道美術、近代美術、それから勿論ルーブルの収蔵作品を展示する。「時と空間の対話：ルーブルとアジアの出会い」という基本コンセプトをつかって、滋賀の誇るべき遺産とルーブルの収蔵庫に隠れている作品を並べて展示する。

そうすると、「滋賀ルーブル美術館という名前は行ってみたいくなるか？」YES、「国内唯一、前例のない美術館になるか？」YES、「話題性のある美術館として県外から多くの来館者が期待できるか？」YES、ということになる。

ルーブル・プロジェクトの意義としては、①日仏文化交流の新時代が開かれる。これまでもルーブル展覧会、ジャパン・フェスティバル、芸術家の交流がありましたが、どれも期間限定のものでしたので、これが常設の館となると非常に素晴らしいことだと思います。②ルーブルの非展示作品が日本で公開されれば、日本およびアジアにおける西洋美術の理解が深まる。③もちろんルーブルにも日本・滋賀県を借景にして頂くことで、西欧におけるアジア美術の理解が深まる。④滋賀県・大津の国際的認知度は高まり、持続的な経済効果も見込める。

5-3. ルーブル・アブダビ美術館の場合

ルーブルは、アラブ首長国連邦の首都アブダビに分館をつくりました。これがまた凄まじい建築でありまして、工事が進んでいるところであります。

そして、名義使用料や作品貸与料などすごいお金が動いておりまして、膨大なオイルマネーが投入されています。しかし、フランス国内では「ルーブルを利益最優先の私企業にするな！」と建設反対の署名が集まったり、アブダビでも建設作業員のボイコット運動が起こったり、さらにイスラム教との兼ね合いから、女性が肌をだしている絵画・彫刻作品の展示の是非などでも問題が起こっています。そういうことで、当初は2014年開館予定だったのが、今年2016年になってもまだ開館に至っていません。これは、お金の問題ではないということです、真面目なコンセプトや「自国（私たちが日本）とフランスをつなぐんだ」という情熱がないと出来ないということです。

5-4. ルーブル美術館ランス別館の場合

一方で、ルーブルはフランス北部のランスにも別館をつくっています（2012年開館）。建物は日本の設計事務所SANAAが設計しています。実はこのSANAA事務所は「新生美術館」の設計もやっていますので、両者はとても似ているんですね。内部はというと、無柱の大空間「時のギャラリー」というのがございまして、時を越えて人類5千年の美術作品を展示しています。面白いことに、ランス別館は美術館として作品を所有・収蔵せずに、展示は1年ごとに2割ずつ入れ換えています。

5-5. 名古屋ポストン美術館の問題点

建物の3階～5階だったと思いますがそこを借りて開かれました。しかし、ポストン美術館とこの分館との契約は非常に不平等で、分館が他の展示を行うことが許可されないこともありました。また名古屋市のほうでも「ポストン美術館」というブランドに頼りすぎ、見通しも甘かったために来館者数も減少していきました。アクセスも良くなく、私はここのトップマネージメントも評価しておりません。日米間のコミュニケーションも不十分で、館の経営をだんだんと圧迫していきました。

5-6. ルーブル・プロジェクト <結論>

「時と空間の対話：ルーブルとアジアの出会い」ということでルーブル美術館のアジア分館を滋賀に誘致してはどうか、という突拍子も無い提案なんですけれども。一方で、気をつけねばならないこともある。アブダビ分館は問題も多く、未だ開館に至らない。また日本では名古屋ポストン美術館の失敗例もある。しかしそうしたものを検討して、ルーブル側と交渉を進めていければ、滋賀、日本あるいはアジアにとっても誇れる画期的な美術館が生まれるのではないかと思うわけです。私としましても体力には自信がありますので、構想実現に向けて、精一杯努力をしてみたいと思っています。どうも、長時間ありがとうございました。